

大分県教育センター 特別支援教育部 調査研究

(令和元年度～令和3年度)

# 特別支援学校における 主体的・対話的で深い学び 実践事例集



大分県教育センター

令和4年3月

## I 目的

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する課題を明らかにし、課題解決に向けた実践を行い、実践事例を県内特別支援学校に共有化すること。

## II 課題

令和元年度、県内特別支援学校（16校）の管理職及び各学部主事を対象にアンケートを実施し、以下のことが課題として挙げられた。

### ① 「深い学びの実現」

「できていない」「あまりできていない」という回答が60%

### ② 「教科別の指導実践の充実」

「授業実践の様子」では、教科別の指導は、30事例中 7 事例（生活単元学習は 15 事例）

### ③ 「重度の児童生徒の対話的な学びの実現」

病弱・肢体不自由学校において、「多様な手段で伝える」ことを課題に挙げる回答

上記のことから、①「深い学びの実現」②「教科別の指導の充実」③「重度の児童生徒の対話的な学びの実現」が必須の取組であると考えた。そこで県立特別支援学校に協力を依頼し、ステップアップ研修Ⅱの受講者である採用3年目の教員に、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業実践を行ってもらい、その実践例を集積し、県内に共有化することとした。

## III 授業実践に向けての教育センターの支援

対象の教員に趣旨説明を行い、事前に電話やメールを通して、授業構成の助言を行った。1回目の提案授業後に助言を行うとともに、授業者アンケートで振り返りを行い、それを基に改めて助言を行った。これらを参考に授業における工夫や改善点を明らかにし2回目の授業を実施した。

## IV 実践

3つの課題解決に向けて、令和2年度は、県立特別支援学校2校に協力を依頼し、採用3年目の教員に、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業実践を行ってもらった。その中で、小学部での取組や重度重複障がい児童生徒を対象にした取組の好事例を集積することができた。

### 【令和2年度の授業者の気付きから明確になった授業改善のポイント】

- ・「対象児童生徒の的確な実態把握を行い、主体的・対話的で深い学びの姿を明確化した上で授業改善する」
- ・「自分事として取り組みたくなるような内容にするとともに、対話したくなるような展開を工夫する」
- ・「教科固有の見方・考え方を重視しながら、更に生活への汎化を意識する」

令和3年度は、県立特別支援学校3校に協力を依頼し、前年同様にステップアップ研修Ⅱの受講者である3年目の教員に授業実践を行ってもらった。また、対象を中学部及び高等部の単一障がいクラスに限定

し、課題①と②の解決に向けて取り組んだ。その中で、好事例を集積することができた。

### 【令和3年度の授業者の気付きから明確になった授業改善のポイント】

- ・「この題材での深い学びの姿とは何か、どのような発言や表現ができれば深い学びに到達したと言えるのかを具体的に設定する」
- ・「深い学びのためには、どうしたら生徒が主体的に取り組むのか、対話を通して思考するのかを考える」

## V まとめ（提言）

今回の取組で、1回目の授業から問題点を明らかにし、改善の視点を踏まえて授業を構築することは、授業者に指導と評価の一体化を意識させ、授業改善のPDCAを実感させる上で有効であった。

- 重度重複障がいのある児童生徒の対話的な学び**では、以下のことが重要であることがわかった。
  - ・「選択の精度を高めるために、『そこにはない』といった否定表現も含め選択肢の幅を増やすこと」
  - ・「即時性を意識し、選択したことを教員がすぐ実践し、児童生徒にフィードバックすることで、児童生徒自身が自分のしたいことが伝わったと実感できるようにすること」
  - ・「これらを踏まえ、児童生徒の表出を見取る力を教師が高めること」
- 小学部の学び**では、以下のことが重要であることがわかった。
  - ・「取り組みたくなる外発的動機付けを意識しながらも、学習を通して、その教科ならではの学びを重視し授業を進めること」
  - ・「児童同士の活動を通して、思考を言語化し、答えにたどり着こうとする学びにすること」
  - ・「教科横断的な視点を取り入れ、学んだことが生活に汎化できることを実感させること」
- 中学・高等部の単一障がいクラスの学び**では、以下のことが重要であることがわかった。
  - ・「学習の意義を理解することや、自分から考えたいような内容を設定するといった内発的動機付けを意識した授業構築をすること」
  - ・「既存の知識を活用して問題を解決できるようにするための題材構想の工夫をすること」

今回の実践を通して、特別支援学校における主体的・対話的で深い学びの授業実践には、

- ・**「児童生徒にとっての必要感を重視し、各自の活動を確保する個別化」**
- ・**「知的障がいの特性を考慮し、1時間の中で解決する問題は一つに絞るといった内容の焦点化」**
- ・**「解き方を教えるのではなく、どうしたら解けるのかという思考の場面を設けるとともに、思考を補助する支援の具体化」** が求められることがわかった。

以上の点に留意しながら、児童生徒にとっての深い学びの実現に向けて、的確な実態把握を行い、主体的・対話的で深い学びの姿を明確にし、指導と評価の一体化を意識した授業改善が求められる。

実践事例を参考に、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質能力の育成を目指してほしい。そのためにも、「子どもを主語」にした授業改善に向け、生徒指導の三機能と言われる「自己存在感を与える場の設定」「共感的人間関係を育む場の設定」「自己決定の場の設定」を心がけてほしい。

## 実践事例① 小学部 単一障がい 3年生 算数

1回目の授業は、教師が一方向的に説明することが多く、児童同士の対話や教材を通して子どもが自己内対話をする場面があまり見られなかった。また児童が筆箱で遊ぶ時間が長く見られ、授業に集中できていない様子であった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) どのような姿が主体的・対話的で深い学びなのかを具体的に示す。
- (イ) 教師の意図を明確にし、子どもが自分事として学びたい内容にする。
- (ウ) 子どもたちが試行錯誤し、お互いに話し合いながら答えを導き出せるような手立てを用いる。
- (エ) 学習内容が実際の生活に汎用されるよう、他の学習場面との関連をもたせる。

(ア)～(エ)を踏まえて改善を図った2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「右と左の言葉を使って、方向を指差したり、ものの位置を表したりしよう」
- (2) 題材目標 (知・技)身の回りのものについての方向を表す言葉(左右)を知り、その言葉を使って、ものの方向を言い表すことができる。  
(思・判・表)右と左の言葉を使って、友だちにももの方向を教えることができる。  
(学・人)方向を伝える活動に興味を持ち、進んで友だちへ伝えようとしたり、友だちからの言葉を聞いて動いたりする。

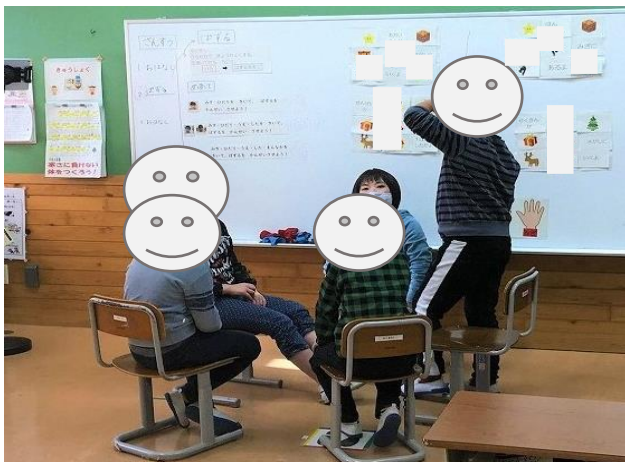
※本実践事例集では、知識及び技能を知・技、思考力・判断力・表現力等を思・判・表、学びに向かう力・人間性等を学・人と表す。

- (3) 本時の目標 友だちからの指示を聞いたときに、基準となるものの場所から左右のどの方向に置いたらよいかのかわかり、正しい場所にピースを置くことができる。
- (4) 展開 ※教師が意図的に改善した点を赤字にして追加記入

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1.本時の内容を 知る。	○本時の活動内容を板書する。 <u>改善:机上には必要最低限の物しか置かず、導入時の説明を短くした。</u>
2.めあてとパズル課題を知る。	○活動に興味を持つことができるように、サンタクロースからの手紙(教室の何処かにプレゼントを置いてきたという内容)を代読する。 ○プレゼントの場所が示されたヒントパズルを提示し、この時間に頑張ることとしてのめあてを示す。 A 見めあて:みぎ・ひだりをきいて、パズルをかんせいさせよう! ○パズルをするときの約束を提示する。 やくそく ①ふたりで きょうりよくする。②きいてから うごく。 ○パズル課題の前に左右の確認をするため、「右(左)手あげて」と言葉がけをする。 <u>改善:取り組みたいような外発的動機付けを意識した内容とした。課題を「左右の位置関係」のみとして、指導と評価の一体化を図った。ペアで協力できるように、役割を明確化した。</u>



<p>3.パズルゲームをする。 (評価場面)</p>	<p>○パズルの仕方を提示し、2人組に分かれ課題1のパズルに取り組む。          ・ピースを置くときに悩むときは、視覚支援ツールを使ってよいことを伝えたり、「右手はどっちかな」等の言葉がけをしたりする。          ○完成したら全員でパズルに示されたヒントを読み、A児がプレゼントのありかを探しに行く。          ○2回目のパズルゲームに取り組む。完成したら、D児にプレゼントを探しに行ってもらい、全員でプレゼントの中身を確認する。  <u>改善:ゲームだけの活動にならずに、算数の見方・考え方を考慮し、右・左を意識した言葉がけを適宜行うようにした。</u></p>
<p>4.まとめをし、順番に振り返りをする</p>	<p>○プレゼントを一度回収し、全員にめあてについてできたかを尋ねる。          ○左右についてのまとめ(自分から見ての右左の方向を確認)をする。          ・自分から見た方向を意識できるように、<b>みぎ</b>・<b>ひだり</b>と記されたシールを手の平に貼り、自分から見た方向と他者と向かいあったときの方向の違いに気付くことができるようにする。          ○振り返りを一人ずつ行う。          ・発表の内容を持てるように、今日の学習でわかったことや、何ができたのかを尋ねるようにする。  <u>改善:教師が一方向的に話すのではなく、子どもたちの言葉で、授業の振り返りを行うようにした。「廊下は右側を通ろう」など、生活への汎化を意識できるようにした。</u></p>



※振り返りの場面を設定し、児童が集中しやすいように、教師の周りに円になって座り、自分たちの言葉で振り返りを行っていた。

### (5) 実践の総括

4つの助言から教師は「子どもたちが進んで取り組む主体的な学び」「子どもたち同士で協力し合いながら取り組む対話的な学び」「子どもたちが試行錯誤しながらも、答えを見つけ出そうとする深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、ゲーム的要素を取り入れることで対象児の興味・関心に沿った授業構成となり、集中して取り組む姿が見られた。また、ペア活動を授業の中心とする授業構成にしたことで、対話を通して協力して答えを導き出そうとする姿が見られた。ゲームに興味偏りすぎないように、教科指導の本質を踏まえ、算数の見方・考え方を重視した学習展開にすることが、深い学びにつながった。

## 実践事例② 中学部 重複障がい 2年生 自立活動

対象生徒は発語はないが、教師の問いかけに表情や顔の動きで「はい」か「いいえ」を選択・表出ができる生徒であった。1回目の授業で、視線入力機器を用いていたが、選択する場面が少なく、生徒自身が視線入力の必要性を感じていない様子で、日頃のやりとり以上の表出が見られなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下のことを指導・助言した。

- (ア) 主体的に生徒が視線入力機器を用いて対話をしたくなるように、選択肢を増やす、選びたいものがない場合は「この中にはない」を選ぶようにする。
- (イ) 本当にその選択で合っているのか確認できるようにする。
- (ウ) 視線入力機器を用いて生徒から能動的に話しかけられる仕組みを作る。
- (エ) 生徒自身が、負担なく選択できる選択肢の個数がいくつなのかを見極め、今まで以上の表出ができるようにする。

(ア)～(エ)を踏まえて改善を図った2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「視線入力機器を使って気持ちを伝えよう」
- (2) 題材目標 (知・技) 視線を動かして、視線入力機器を操作する。  
(思・判・表) 視線を動かしながら、正しい選択肢を選んで相手に伝えることができる。  
(学・人) 顔を上げ、伝えたい内容を選ぼうとすることができる。
- (3) 本時の目標 写真やイラストを見て、自分が伝えたい内容に合った写真やイラストを、視線を動かしながら選ぶことができる。
- (4) 展開 ※教師が意図的に改善した点を赤字にして追加記入

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1.はじめのあいさつをして学習内容を確認する。	○本時の内容とめあてを、ホワイトボードを使って確認する。 ・活動に使う教材の写真等を使って提示する。 ・活動の中で特にめあてとなる活動の横に頑張るカードを張り付ける。
2.体をほぐすためのストレッチを行う。 (仰臥位)	○マットに降り、緊張をほぐすためにストレッチを行う。 ・体を動かす部分は事前に触りながら動かすことを伝え、けがにつながらないようにする。
3.視線を動かす練習をする。	○視線入力機器を使った選択の仕方を確認するために、4枚～8枚の写真から視線を向ける人物を伝える。 <u>改善:負担なく選択できる選択肢が4つ程度なので、4つの選択肢に「次のページ」や「この中にはない」といった選択肢を加えたものにした。</u> ・興味のある、好きな先生の写真を使用する。 ・教師が伝えた人物に視線が行かない場合、指差しをしながら視線を向ける場所を伝える。 ・正確に視線を向けることができた場合、正確に見ることができたことを賞賛する。

<p>4.視線入力機器を使って朝の会の練習を行う。</p>	<p>○視線入力機器を使って、朝の会の司会を行う。  <u>改善:生徒が選んだ活動をすぐに教師が反応し、生徒にフィードバックするようにした。</u>          ・視線入力機器で選んだ内容を聞いて、教師が行動をするようにする。          ・『健康観察』『朝の歌』『先生の話』は内容を対象生徒本人が選べるようにする。          ・本人が選んだ内容を教師が声に出して伝え、選びたい内容であったか確認する。          ・伝えたい内容とは違う選択をした場合、画面を戻り、写真やイラストの確認をした後に選びなおせるようにする。          ・伝えたい内容を選択できた場合、内容に沿って教師が行動をし、会を進め、会が進行できたことを賞賛する。</p>
<p>5.視線入力機器を使って教師と会話をする。</p>	<p>○自分のタイミングで視線入力機器を使って教師に声をかけ、気持ちを伝える。  <u>改善:生徒自身が話しかけたい時に視線入力機器を用いて伝えるようにした。</u>          ・選択した内容が、伝えたい内容であることを確認しながら会話をする。          ・伝えたい内容を正確に伝えられた場合、伝わったことを称賛し、選択した内容について会話を続ける。</p>
<p>6.振り返りをして終わりの挨拶をする。</p>	<p>○本時のめあてを再度確認し、頑張ったことを褒め、まとめを行う。          ・本時の学習で用いた教材を提示しながら、頑張ったことを褒める。</p>



※今まで授業中にお茶を飲むことがなかった生徒だったので、授業中お茶を飲みたいと表出しないと教師は思っていた。しかし、選択肢を増やしたことで、選択の精度が高まり、生徒自らお茶を飲むことを選択することができ、嬉しそうにお茶を飲む様子が見られた。

#### (5) 実践の総括

2回目の授業で、選択肢を増やし、「この中にはない」という選択肢を設定したことで、判断しにくかった生徒の表出を受け止めることができる場面が見られた。教師の「次は何がしたい」という問いに対して、選択肢が増えたことと選択の精度が高まったことで、授業中にお茶を飲むことがなかった生徒が、「お茶を飲みたい」という表出をして、その表出に教師が気付くことができた。生徒にとって思いを伝えるために視線入力を用いることの価値を見いだすものとなった。教師も同様に思い込みになりがちだった部分が、生徒の表出を待つ、表出の精度を高めるという意識を持つことで生徒とより深い対話ができるようになった。生徒ができる喜びを感じ、「もっとやりたい」と伝えるなど、次への学習の意欲が高まっている様子が見られた。

### 実践事例③ 中学部 単一障がい 3年生 国語

1回目は、電話の応対を題材にメモを取る授業を行った。電話でお店を予約したいという対象生徒の願いに沿ったものであったが、内容が多く、思考する時間や振り返りの時間を確保することができなかった。また、教師の問いに答える場面はあったが、生徒同士で対話し、思考する場面が見られず、めあての達成に至らなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) めあての意味を生徒が理解できるように生徒の言葉で前時の振り返りを行うようにする。
- (イ) 内容を焦点化し、何のための学習なのかを明確化し、生徒同士の対話を通して、自分にとって使いやすいメモ用のシートを作成するにはどうすればよいかを思考できるようにする。
- (ウ) なぜそう考えたのかという問いかけで、生徒の思考を深めるようにする。

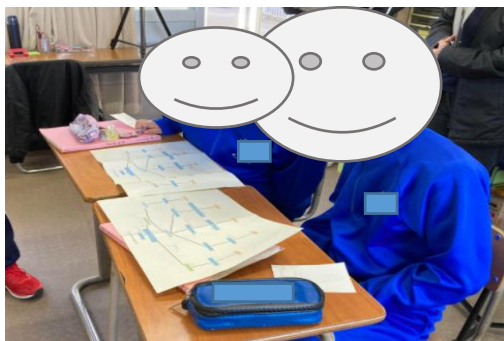
(ア)～(ウ)を踏まえて改善を図った2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「電話で話そう ～受ける・会話をする～」
- (2) 題材目標 (知・技)メモを取るときに、要点を短く書き留め、相手にわかるようにまとめる。  
(思・判・表)身近な人への電話があり不在の場合、メモに残す・かけ直しがある・折り返しかけるの中から、状況に応じて対応する。  
(学・人)友だちのメモの記録やメモをする様子を見て、よい所を取り入れ、素早く正確なメモを作成するためのスキルを見つけようとする。
- (3) 本時の目標 ・『電話受け取りお助けシート』(以下お助けシート)を基にやりとりをする中で、応対できるかできないかの判断をすることができる。(思・判・表)  
・友だちと考えを出し合い、よりよいシートに改善しようとする。(学・人)
- (4) 展開 ※教師が意図的に改善した点を赤字にして追加記入

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1.前時までの学習を振り返り、本時の学習内容を知る。(導入)	○電話の受け方やメモの取り方について振り返る。 <u>改善:めあてを理解できるように、生徒の言葉で前時の振り返りを行うようにした。</u> ・「電話を受け取る時に大事なことはなにがあったかな」、「メモ名人になるためにどのようなメモの取り方をすればよかったのかな」と問いかける。 ○本時の学習内容を知る。 ・前時に作成した『電話受け取りお助けシート』(以下お助けシート)を基に、対面で実践してみることを伝える。
2.『お助けシート』を基に、やりとりをしながら必要に応じて修正し、完成させていく。(展開)	○作成した『お助けシート』を基に、教師とやりとりする。 <u>改善:ロールプレイを通して、実際の場面を想定し、『お助けシート』が具体的に使えるものなのか確認できるようにした。</u> ・一人ずつやりとりをし、『お助けシート』を基に電話応対できるか、できないかを考えられるようにする。 ・応対している生徒は、実践してみてどうだったか、側で見ている生徒は、自分ならばどう



	<p>するかという視点で考えるように伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の『お助けシート』は、自由に書き込みをしてよいことを伝える。</li> <li>・応対している生徒の言葉が出なくなった場合は、なぜ困ったのかを話し合う時間を設け、『お助けシート』に方策を書き込むよう促す。</li> <li>・『お助けシート』のどこに書いてよいかわからない場合は、「どこにこの項目が入るのかな」と問い、他の生徒の意見を聞きながら完成できるようにする。</li> </ul> <p>※やりとりを通し『お助けシート』を自分が使いやすいものにしていく。</p>
<p>3.『お助けシート』を友だち同士で見合う。(発展)</p>	<p>○友だち同士で作成した『お助けシート』を相互に見合う。</p> <p><u>改善:対話を通して自分にとって更に使いやすいシートにするにはの視点で思考するようになった。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・電話で応対した際に困りがなかった場合でも、友だちの『お助けシート』を見て、「こっちのほうがわかりやすい」などの視点を持ち、自分のシートに修正を加える時間を設ける。</li> <li>・自分が使いやすい『お助けシート』になればよいことを伝える。</li> </ul>
<p>4.本時の学習を振り返る。(終末)</p>	<p>○本時の学習内容を振り返る。</p> <p><u>改善:なぜこのようなシートにしたのかを言語化する機会を設けるようにした。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・完成した『お助けシート』と、授業前の『お助けシート』を見比べ、より使いやすいシートが完成したことを確認するようにする。</li> <li>・『お助けシート』の見方を再度確認し、次回は『お助けシート』を活用して電話を受ける学習に挑戦することを伝え、本時を終了する。</li> </ul>



※ペア活動を通して自分のシートと友だちのシートでは何が違うかを見比べ、「そんなやり方があるんだ」「真似していい?」と対話を通して思考する姿が見られた。

## (5) 実践の総括

3つの助言から教師は「自分事として取り組みたくなる主体的な学び」「ペア活動等を通して違いに気づき、自分ならばの視点で思考する対話的な学び」「自分にとって使いやすいシートにするにはどうすればよいかを試行錯誤しながら見つけ出す深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、自分にとって必要なお助けシートを作成し、電話の応対をすることができるようになってほしいという教師の意図が明確であった。前時の振り返りを生徒たちの言葉で行うことで、めあてを意識し、自分事として取り組む姿が見られた。また、ロールプレイを行うことで「その言い方は伝わりやすい」「そのまま書いていたら時間がかかるから省略して書いた方がいい」等、生徒たちから積極的に意見が出ていた。そして、ペアになり、自分のお助けシートを見せ合うことで、「それは書いてなかったから、真似していい?」と友だちの意見を参考にする場面があった。授業後、「自分で作ったお助けシートがあることで、電話の応対ができるようになり、次の授業が楽しみ」という発言があった。友だちの意見も参考にしながら、試行錯誤してシートを作り上げ、それを利用することで電話の応対ができるようになることを実感できる深い学びの授業となった。

## 実践事例④ 中学部 単一障がい 2年生 国語

1回目は、敬語の授業を行った。グループに分かれ、正しい敬語を使っているかを皆で考える活動を行っていたが、なぜよいと判断したのかと、その根拠まで話し合うことができなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) 「なぜこの学習を学ぶのか」ということを生徒が自分事として捉えられるようにする。
- (イ) わざと教師が間違えた例文を出し、間違いに気づいて、それを正す活動を行い、「なぜそう考えたのか」を問いかけることにより教師との対話的な活動を通して生徒の思考を言語化する。
- (ウ) ペア活動やグループ活動を行うときには、「なぜそう考えたのか」という生徒相互の問いかけによる思考の場面を大事にする。

(ア)～(ウ)を踏まえて改善を図った2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「相手に伝わりやすいように、事柄の順序に沿って構成を考えて、説明文を書こう」
- (2) 題材目標 (知・技)相手に伝わりやすくするために、「はじめに」「つぎに」「さいごに」など順序を示す接続詞を使って説明文を書くことができる。  
(思・判・表)作業学習の工程についての説明文を書くときに、順序に沿った構成を考えて書くことができる。  
(学・人)「相手に伝わりやすくなっているか」を意識して、説明文を書くことができる。
- (3) 本時の目標 ・わかりやすい説明文を書くためには、事柄の順序に沿って文を構成する必要があることがわかる。(知識・技能)  
・「工程カード」を工程順に並べ替え、適した接続詞を選んで、説明文を作成することができる。(思・判・表)
- (4) 展開 **※教師が意図的に改善した点を赤字にして追加記入**

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1. 本時の学習内容を知る。	○前時までの学習内容を振り返る。 <b>改善:小学部の先生から「後輩のために説明文を作ってほしい」という動画を流し、生徒のやる気を引き出し、何のための学びかを生徒に自覚させるようにした。</b> ・小学部6年生の担当教師から届いた依頼メッセージの動画を見るようにする。 ○本時のめあてと学習内容を知らせる。 <b>めあて:作業工程をわかりやすく伝える文章を考えよう</b>
2. 伝わりやすい説明文にするためには、どのようにしたらよいかを考え、意見を出し合う。	○教師がホワイトボードに提示した例文(先月行ったみかん狩りの手順についての説明文)を読んで、感じたことやわかりにくいと感じる理由を考えるように促す。 <b>改善:わざと間違った例文を示すことで、生徒から意見を引き出そうとした。</b> ・友だちと意見を共有するために、感じたことを発表するようにする。 ○生徒同士で意見を出し合い、教師が提示した例文をみかん狩りの正しい手順に並べ替える。 ・例文を、教室前面のホワイトボード上で並べ替えられるようにする。 ○正しく並べ替えた後、各段落の初めに、どのような接続詞をつけたらよいかを考える

	<p>ように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの学習で、どのような接続詞が出てきたかを振り返るようにする。</li> </ul> <p>○わかりやすい説明文を書くためには、どのような書き方をしたらよいかを問いかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒から出た意見を板書する。</li> </ul>
3. 「工程カード」(前時に作成)を並べ替える。	<p>○作業の工程ごとにすることをまとめた「工程カード」を「わかりやすい説明文にする」ために並べ替えるように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工程の順番を思い出すことが難しい場合は、工程ごとの写真を提示する。</li> </ul>
4. 接続詞を考える。	<p>○それぞれの工程を説明する文章の前に、どのような接続詞をつけたらよいかを考え、接続詞カードを貼るようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで学習した内容を振り返り、「まず」「つぎに」「それから」「さいごに」などの接続詞を使えばよいことに気付けるようにする。</li> </ul>
5. 隣同士でペアになり、意見や感想を伝え合う。	<p>○ペアの相手と説明文を交換し、相手が考えた説明文を読んで、わかりやすかったところやわかりにくかったところについて、意見を伝え合う。</p> <p><u>改善:なぜわかりやすいのか、わかりにくいのかを表現できる場を設定した。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜわかりやすいと感じたのか、または、わかりにくいと感じたのかを詳しく説明するようにする。</li> </ul> <p>○皆の前で自分が考えた説明文を発表し、友だちの意見を聞いたり、質問に答えたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜわかりやすい、または、わかりにくいと感じたのかを詳しく説明するようにする。</li> </ul>
6. 本時の学習を振り返る。	<p>○本時の活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・できたことやわかったこと、わからなかったことを発表するようにする。</li> <li>・できたことを教師が具体的に言語化して、大いに認める。</li> </ul> <p>○次回の授業の予告をする。</p>



※導入時に依頼の動画を見ている様子。「中学部に入ると作業学習があると聞いています。小学部には作業学習がありません。小学部6年生のために、その説明を行ってほしいです」という内容で、生徒たちは「後輩のために」という気持ちで、学習に取り組む姿が見られた。

### (5) 実践の総括

3つの助言から教師は「目的意識を持って取り組む主体的な学び」「ペア活動を通して思考を言語化する対話的な学び」「小学部の児童のためにもっとわかりやすく説明するにはどうすればよいかを思考し続ける深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、題材の最後に、実際に小学部の児童の前で説明を行うという場の設定をしたことで、生徒たちは「どうしたらうまく伝わるかな」という意識で思考する姿が見られた。また、なぜこの活動を行うのかが明確となり、伝わりやすくするにはという意識で思考することで、「それじゃあ、こっちの方が伝わると思う」といった発言が見られた。目的が明確になることで、伝わりやすくするにはという視点で思考し続ける深い学びの授業となった。

## 実践事例⑤ 中学部 単一障がい 2年生 数学

1回目は、筆算の学習を行った。ゲームの要素を入れた活動で生徒も楽しそうに取り組んでいたが、導入に時間がかかり、ねらいであった活動に時間をかけることができなかった。また振り返りの時間を設定することができなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) 導入を簡略にして、最も時間をかけて行う主活動を明確にする。
- (イ) 対話を通して思考が深まるようにするため、それを補助するツールを用意する。
- (ウ) 生徒がこの時間で何を学んだのかを生徒の言葉で振り返る時間を確保する。

(ア)～(ウ)を踏まえて改善を図った2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「身近な物の重さを測ろう (測定)」
- (2) 題材目標 (知・技) 重さの単位 (g・kg) について知り、測定の意味を理解することができる。  
(思・判・表) 身の回りのものに着目し、はかりを使い重さの単位を用いて的確に表現することができる。  
(学・人) 日常生活の中に用いられている重さに気付いたり、はかりを使ったりして重さを求めることができる。
- (3) 本時の目標 ・重さがわからない時には、はかりを使えばよいことがわかる。(知識・技能)  
・1kgまでの残りの重さの量を重い・軽いなど判断をして1kg±0.5の重さにすることができる。(思・判・表)
- (4) 展開 ※教師が意図的に改善した点を赤字にして追加記入

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1. 本時の内容を確認する。	○前時の振り返りと今日の授業内容を伝える。 <u>改善: みかん狩りの体験を生かした内容を扱い、生徒が発表することで前時の振り返りを行い、本時の活動と結び付けるようにした。</u> ・自分たちが取ってきたみかんを量り、それぞれの重さが違ったこと、みかん1個分は大きさや重さに違いがあったことを確認する。 ○本時のめあてと本時の活動を、視覚的にわかりやすいようにホワイトボードに提示する。 ・今日は ①重さ比べクイズ ②1000gにしよう の2つの活動をする事を伝える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">めあて: みかんを1000gの重さにしよう</div>
2. 重さを比べて並べる。	○100g・300g・500g・800g・1kgの重さを順番に並べる。 ・2つのチームに分かれ、10分間で5種類の重さのものを比較し、軽い順番に並べ、板書するようにする。
3. 1000gになるように重さを考える。	○みかんを用いて、1000gの重さにする。 <u>改善: 考える視点を明確にし、思考を言語化しやすいように、ヘルプカードという生徒の思考を補助するツールを用意した。</u> ・4つのグループに分かれて、1000gの重さのみかんにすることを伝え、みかんを配る。 ・2回ヘルプカード(はかり・先生ヒント)を使ってもよいことを伝え、カードを渡す。



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はかりの1000gはどこなのかをイラストで確認し、1000g±50gでよいことを説明する。</li> <li>・ピタリ賞とニアピン賞を設定し、1000gになるようにチームで考えるように促す。</li> </ul> <p><b>重さがわからずに困っている場合</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ヘルプカードを使ってもよいことを伝える。</li> </ul> <p><b>先生ヒントを選んだ場合</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペットボトルを渡し、ペットボトルの重さが1000gであることを伝える。</li> <li>・ペットボトルの重さと比べて、どちらが重いか軽いかを聞く。</li> </ul> <p><b>はかりを選んだ場合</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1000gより重いのか軽いのか、あと何g必要かを確認する。</li> </ul>
4.グループごとのみかんの重さを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○グループの重さを確認する。</li> <li>・4つのグループのみかんをはかりにのせて、重さを確認する。</li> <li>・軽かったり重かったりした場合は、どうすればよかったかを生徒の言葉で確認する。</li> </ul>
5.本時のまとめと振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○めあての振り返りをする。</li> </ul> <p><b>改善：振り返りの時間を十分に確保し、生徒の言葉で本時の振り返りを行い、めあてが達成できたかを確認するようにした。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1000gの重さにするときに、どんなことに気をつけたか、どんなことが難しかったかを聞く。</li> <li>・次回の授業の予告をする。(1kgと1000gの関係)</li> </ul>



※ヒントカードを用いて、ペットボトルの重さを基に、ペアで思考している場面。「ぼくは重さが足りないからもう少しみかんを入れた方がいいと思う」「でも何個入れる?」といった対話を通して、思考する場面が見られた。

#### (5) 実践の総括

3つの助言から教師は「今までの体験を生かすことで取り組みたくなる主体的な学び」「クイズ形式にしながらもなぜそうしたのかを表現しあう対話的な学び」「なぜそう考えたのか、どうすればよかったのかを生徒自身が思考できる場を多く用意し、めあての達成を目指す深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、直近で行われたみかん狩りの体験を生かす内容にしたことで、生徒たちが主体的に取り組む様子が見られた。導入では、生徒の言葉で前時の振り返りを行うことで、今までの学びを整理することができていた。また中心となる活動の時間を十分に確保したことで、生徒同士が対話を通して思考する場面が多く見られた。教師は「重さの感覚を身に付けて欲しい」という願いで題材構築をしていった。その中で他のみかんの重さや、ペットボトルの重さと比較するという、生活への汎化を意識した授業内容になっていた。「みかんによって重さがちがうね」「あと1つで1000gになるんじゃない」「どっちのみかんが重いか、両手に乗せて考えてみよう」と対話を通して思考が言語化される場面が多く見られる授業となった。

## 実践事例⑥ 中学部 単一障がい 2年生 美術

1回目は、鑑賞の学習を行った。最初に鑑賞を行うことで、生徒自身の描いてみたいという動機の涵養を大事にした授業であった。しかし、教師の説明が長く、生徒たちの言語活動が十分に保障されていなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) 教師の説明を簡潔にし、生徒の気付きを大事にするため、考えを表出できる時間を十分に確保する。
- (イ) 自己内対話も含め、対話を通して思考できるように、作品を見比べる時間を設ける。
- (ウ) 生徒の「描いてみたい」という気持ちを第一に考え、生徒自身が見比べながら、気づき、選ぶことができるようにする。

(ア)～(ウ)を踏まえて改善を図った2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「あったらいいな、おもしろ野菜 ～野菜のおなかをデザインしよう～」
- (2) 題材目標 (知・技) 模様の描き方がわかる。  
(思・判・表) 描きたい模様や色を構想したり、塗る場所に合わせて画材を使い分けたりする。  
(学・人) 野菜の断面の形を表現することの面白さに気付く。
- (3) 本時の目標 ・2つの模様の描き方がわかり、描くことができる。(知識・技能)  
・画材の使い方を工夫して、描き方を構想することができる。(思・判・表)
- (4) 展開 **※教師が意図的に改善した点を赤字にして追加記入**

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1. 前時の振り返りと本時の説明をする。	○本時の学習の内容を提示しながら確認する。 ・面白い野菜の絵を完成させるために、制作中の野菜の絵に、どのような模様を描くかを考える授業であることを伝える。 ・作った作品は、次の時間に見本カードにして配ることを伝える。
2. 模様を描く。 ①しましま	○模様の描き方を2つ、教師が実際に見せ、描いた見本を黒板に掲示する。 <b>改善：ポイントのみを説明し、生徒の感想を聞く時間を十分確保し、作品の違いや模様の違いについて生徒の言葉で表現できるようにした。</b> ・線の動きに注目しやすくように黒のみで描くことを伝える。  ①ストライプ(しましま) ○教師が描いた線のみ作品と面で分割した作品を見て感想を問う。 ・同じしましま模様でも、画材や描き方を変えると印象が変わることを伝える。 ○各グループに配られた画材を使って、しましま模様を描くようにする。 ・描き方がわからない生徒には、教師の見本の中で描いてみたい物はないかを聞き、どこから描き始めたらよいか教え、促す。 ○できた作品を、黒板に貼る。 ・掲示した全員の作品の感想を聞き、全員に共有するようにする。

<p>3. 模様を描く。 ②てんてん</p>	<p>②ドット(てんてんやまる)</p> <p>○教師が綿棒で描いた作品やスポットで描いた作品等を見て感想を問う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同じてんてん模様でも、画材や描き方を変えると印象が変わることを伝える。</li> </ul> <p>○しましまの時と同じように画材を工夫して、てんてんやまる模様を描くようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・はがき大の画用紙を配布し、自分が使いたい画材を選び描くように伝える。</li> </ul> <p>○できた作品は、黒板に貼る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・掲示した全員の作品の感想を聞き、全員に共有するようにする。</li> </ul>
<p>4. 友だちの作品を参考に、再度模様を描く。</p>	<p>○友だちの作品を見て参考になった点を基に、再度模様を描くようにする。</p> <p><u>改善:友だちの作品を見て、自分もこう描いてみたいという気持ちを大事にし、表現できる時間を確保した。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・野菜の絵に反映するにはという視点で描くように伝える。</li> </ul>
<p>5. 本時の振り返りと次回の予告をする。</p>	<p>○模様の描き方や線に注目して、自分と友だちの作品を見合い、意見を問う。</p> <p><u>改善:なぜその模様の方がよいのか等、生徒の思考を言語化できるようにした。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の作品と友だちの作品との違いは何か、またなぜその模様が好きか等を聞く。</li> </ul> <p>○次回は、今日描いた2つの模様から1つを選び、全員の作品をカードにして配ること、絵の具を使って画用紙の野菜に描いていくことを伝える。</p>



※最初は縦の線を描き、線と線の間点を描いた作品を完成させたが、友だちの作品を見ることで「シンプルに描いた方が野菜の絵に合う」と気づき、細かい点をたくさん描いた作品を完成させた。友だちとの対話とともに、自己内対話をしながら作品を完成させる様子が見られた。

### (5) 実践の総括

3つの助言から教師は「生徒の描きたいという気持ちを大事にした主体的な学び」「自己内対話も含め、作品を見ながら皆で意見を伝え合う対話的な学び」「友だちの作品を参考にしながら、どうすれば野菜の絵に合う模様になるのか熟考する深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、生徒の描きたい気持ちを大事にした授業構成としたことで、生徒たちがいろいろな画材を用いて、様々な模様の作品を完成させていた。また、できた作品を鑑賞する時間を設定したことで、生徒たちから多様な意見が出る対話的な授業となった。そして、振り返りの時間を十分に確保したことで、「最初はこっちの方がいいと思って描いたけど、友だちの作品を見てシンプルに描いた方が野菜の絵に合うと思った」という生徒の発言があった。生徒が熟考して作品を完成させたことがわかる発言であった。作品を見合うことで、生徒たちが友だちのよいところを探そうとする姿が多く見られ、褒められた生徒は自然と笑顔になり、自己肯定感を高める活動にもなっていた。

## 実践事例⑦ 高等部 単一障がい 1年生 数学

1回目は、分数を題材に授業を行った。その際、折り紙を用いて視覚的にわかりやすくしたいという意図はあったが、折り紙を折ることに時間がかかり、思考する時間を十分確保することができていなかった。また生徒同士で教え合う場面はあったが、対象生徒が理解するまでには至らなかった。そこで、1回目の授業後及び2回目の題材計画設定時に以下の指導助言を行った。

- (ア) 内容を焦点化し、その時間での主発問を精選し、生徒同士で思考する場面を設定する。
- (イ) 見通しを持ち主体的に取り組めるように、今までの学びを生かして、本時の問いを解くことができる内容にする。
- (ウ) 生徒の思考を優先し、教師の支援を最小限にする。生徒たちが試行錯誤し、話し合いながら答えを導き出せるような手立てを用意する。

(ア)～(ウ)を踏まえて改善を図ったA校の2回目の授業実践を紹介する。

- (1) 題材名 「平面図形や立体図形の特徴を知ったり、面積を求めたりしよう」
- (2) 題材目標 (知・技) 平面図形の特徴や性質を理解し、三角形や平行四辺形の内積を工夫して求めたり、公式を用いて求めたりすることができる。  
 (思・判・表) 立体図形の特徴や構成する要素に着目し、立体図形を平面上で表現したり、図形の特徴を捉えたりすることができる。  
 (学・人) 日常生活の中に用いられている図形に気付いたり、その面積を求めたりすることができる。
- (3) 本時の目標 三角形の内積を工夫して求める過程で、直角三角形は長方形の半分ということに気づき、公式を導き出して、面積を求めることができる。
- (4) 展開 ※教師が意図的に改善した点を赤字にして追加記入

学習活動	○教師の支援・指導上の留意点
1. 本時の内容を確認する。 (導入)	○前時の振り返りと今日の授業内容を伝える。 <u>改善: 前時の学びが本時の学びにつながっていることが意識できるようにした。</u> ・前時のワークシートを振り返り、前時でどんな学習をしたか問う。 ・見通しを持って学習に取り組むことができるように、スライドで流れを示した後、ホワイトボードに今日の授業内容を示し、生徒の言葉で確認する。 ・1次で作った図形を提示し、面積を求める際のヒントになるようにする。
2. 長方形、平行四辺形の面積の求め方を復習する。	○長方形、平行四辺形の面積の求め方を復習する。 <u>改善: 求め方を提示せずに、問題を提示することで面積の求め方を復習した。</u> ・形は違う同じ面積の四角形(64 cm <sup>2</sup> )を2つ提示し、どちらの面積が大きいかを生徒に問い、面積を求めて比べてみる。 ・前時で平行四辺形の面積を求める際に、平行四辺形の一部を直角三角形と見て、移動させて、長方形にして面積を求めたことを確認する。



	<p>○本時のめあてを伝え、視覚的にわかりやすいようにホワイトボードに提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">めあて：直角三角形の面積を工夫して求めよう</div>
<p>3. 直角三角形の面積の求め方を考える。 (考察)</p>	<p>○直角三角形を提示し、どのようにして面積を求めたらよいかを考えさせる。</p> <p><u>改善：対話を通して思考が生まれるようにペア活動を行い、公式を示さずに、タイミングを見てポイントとなる点を示した。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・面積を求める直角三角形を提示し、どのように面積を求めたらよいかを考えさせる。</li> <li>・友だちとペアになって考えるように促す。</li> <li>・ポイントとして、これまで学習してきた正方形、長方形、平行四辺形の面積の求め方を生かすように伝える。</li> <li>・難しい様子が見られる時には、ポイントを確認するように促し、方眼マットに直角三角形を置いて、底辺や高さに気付くことができるようにする。</li> </ul>
<p>4. 直角三角形の面積を求めて発表する。 (発展)</p>	<p>○導き出した直角三角形の面積を発表する。</p> <p><u>改善：ペアで出した求め方を発表する機会を設け、他のペアとの違いを比較するようにした。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのように面積を求めたかをペアごとに発表する。</li> <li>・気付いたことがあれば発表するように促す。</li> <li>・直角三角形の面積は長方形の面積の半分<math>\frac{1}{2}</math>で求められることを確認する。</li> </ul>
<p>5. 本時のまとめと振り返りをする。 (終末)</p>	<p>○振り返りシートに自己評価を記入するように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個別に教師とやり取りをする中で、わかったことを聞く。</li> <li>・できたことを教師が具体的に言語化し、大いに認める。</li> </ul>



※最後にペアの代表が前に出て発表を行う様子。対象生徒は、自分たちで考えて導き出した求め方について、自分の言葉で説明することができていた。

### (5) 実践の総括

3つの助言から教師は「生徒が自ら考えて解きたくなる主体的な学び」「生徒同士で協力し合いながら取り組む対話的な学び」「生徒が今までの学びで得た知識を用いて、試行錯誤しながら答えを見つけ出すことができる深い学び」を設定し、2回目の授業を実践した。2回目の授業では、直角三角形の面積を、公式を用いず、前題材の分数や前時まで学習した四角形の面積の求め方といった既存の知識を用いることで答えを導き出そうとする内容となった。対象生徒は、全ての辺の長さを測りながら、どのように解けばよいか悩む姿が見られた。そこで教師は長方形を示し、気がつく点がないかを尋ねることで、直角三角形は長方形の半分であるということに気がついた。そこから長方形の面積を2で割ればよいという思考に到達することができた。授業後、対象生徒は「こんなに頭を使った授業は初めてだったけど、答えが出せて本当に嬉しかった」と発言していた。既存の知識を活用し、試行錯誤しながら答えにたどり着くという深い学びにつながる授業となった。

## 【引用・参考文献】

- 三浦光哉 編著 『特別支援教育のアクティブ・ラーニング』 ジアース教育新社 2017年7月
- 佐藤里美 監修 『特別支援教育ですぐに役立つ! ICT活用法』 学研 2018年4月
- 田村学 著 『深い学び』 東洋館出版社 2018年4月
- 全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著 『知的障害特別支援学校における深い学びへのアプローチ』 東洋館出版社 2019年1月
- 神山努 編著 『知的障害教育ならではの主体的・対話的で深い学びができる本』 学研 2019年8月
- 吉田真理子 編著 『知的障害特別支援学校の「主体的・対話的で深い学び」』 ジアース教育新社 2019年9月
- 新井英靖 編著 茨城大学教育学部附属特別支援学校 著 『特別支援学校 新学習指導要領「国語」「算数・数学」の学習指導案づくり・授業づくり』 明治図書 2020年6月
- 武富博文・増田謙太郎 編著 『特別支援学級 特別支援学校 新学習指導要領を踏まえた「学習評価」の工夫』 ジアース教育新社 2020年7月
- 横倉久 監修 全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著 『知的障害特別支援学校における「深い学び」の実現』 東洋館出版社 2020年10月
- 宮崎英憲 監修 是枝喜代治 編著 『特別支援学校 新学習指導要領・授業アシスト 資質・能力を育む国語』 明治図書 2020年10月
- 宮崎英憲 監修 関戸英紀 編著 『特別支援学校 新学習指導要領・授業アシスト 資質・能力を育む算数・数学』 明治図書 2020年10月

問い合わせ先

### 大分県教育センター

〒870-1124 大分市大字旦野原847番地の2

電話：097-569-0118(代表)

097-569-0232(特別支援教育部)

メールアドレス：a31401@pref.oita.lg.jp